

「伝え感じる力」

株式会社ニコン

コアテクノロジー本部レンズ技術開発部

永野 幹典

私は、2013年3月に精密科学・応用物理学専攻精密科学コース博士課程を修了し、同年4月より株式会社ニコンで働いております。一浪で博士課程を修了し、入社4年目32歳の私が、フレッシュマンと称していいのかどうか怪しいですが、せっかくいただいた機会なので、抱負を語らせていただきます。

私の学生時代の研究テーマは「高精度非球面スーパーミラーの作製と中性子集光デバイスへの応用」という大強度陽子加速器施設J-PARCで使用される光学素子の加工、計測、評価に関するものでした。大学実験室（大阪府）での加工計測実験、J-PARC 実験室（茨城県）での評価実験と、徹夜で実験、大阪-茨城間の移動、徹夜で実験を繰り返す体力的にもかなり厳しい毎日でしたが、多くのひとの助けもあり、自分自身納得のいくところまでやりきることができました。超精密科学研究センター遠藤教授、山村准教授はじめ、お世話になった先生方、研究室のメンバー、同期の皆さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。

こうした形で学生時代光学素子の開発に携わる中で、半導体露光装置に搭載される投影レンズのような少量高精度品、コンパクトデジカメのような大量に生産される民生品の生産を両立する光学メーカー、中でもニコンについては学部時代から興味がありました。私の在籍していた精密科学コースでは学部3年時に数社の企業を見学させていただく機会があり、我々の年はニコン相模原製作所を見学しました。その際、大学OBの方が対応してくれましたが、その方の言葉の一つ一つから志をもって熱く仕事をしていること、会社がそれを応援してくれる姿勢だということが伝わってきました。その後、他のOBの方とお話させていただいてもニコンでの仕事は自分にとってすごく魅力的に感じました。ニコンで働きたいと思う気持ちは、修士課程、博士課程にいても変わらず、縁あって入社する運びとなりました。

入社後は現在所属しているレンズ技術開発部という部署に配属となりました。弊部は光学素子の加工、計測、薄膜、樹脂成形の研究開発に携わる部署で、現在の業務としては、レンズ研磨の研究開発に携わっています。入社して3年半近く過ぎましたが、会社に入って一番考えさせられたのは量産というもののづくりの難しさと、違うフィールドで働く人に自分の思い、考えを伝える難しさで

す。今の部署は研究-開発-生産と、開発した技術を生産現場に技術移管するところまでおこないます。学生時代の研究は「高くてもいいし、時間がかかってもいいから高精度のもの」という思想が強く、コスト、リードタイムが明確に決まったものづくりに触れるのは初めてでした。実際に量産現場に携わると、現場は良品が安定して生産できてなんぼなので、机上計算で「こうなるはず」では受け入れてもらうのは難しいということを経験しました。

入社した当初は机上計算で、「こうなるはず」という主張をすることが多かったのですが、実際の現場では実績のない若造の言うことなんて聞いてもらえない空気ではありませんでした。当初はそれがとても悔しく、なんとかしてでも現場も納得する技術開発をして見返してやるぞというのが、大きなモチベーションでした。初めはこんな反骨心に近い気持ちでいたのですが、現場の方に協力してもらい開発した技術の実証をすすめる中で、気持ちは変わっていきました。そのきっかけは、開発した技術でいい結果が出た際、協力してくれていた現場の方がまるで自分のことのように喜んでくれたことでした。いくら技術を開発してもその技術を使って製品をつくってくれるのは現場の方です。見える結果で新しい技術の有用性を実証し、いいものがつくれるよこびを共感することで、現場との関係も目に見えてよくなり、話を聞いてもらえるのはもちろん、相手から話しかけてもらえる機会也非常に増えました。

信頼してもらえるようになったことで困りごとの相談を受けることも増えてきました。現場での困りごとには新たな開発の種となるような現象も多く潜んでおり、関係性を築けたことで自分自身の仕事の幅が一気に広がりました。ニコンの企業理念は「期待を超えて、期待に応える」です。これはお客様に対してだけでなく、一緒に働くひとたちに対しても同様で、依頼された仕事には120%で応える姿勢でこれからも日々邁進し、会社を盛り上げていきたいと思っています。

最後になりましたが、このような寄稿の機会をくださいました遠藤教授にこの場をお借りして御礼申し上げます。

（精密 平成20年卒 22年前期 25年後期）